

雜

纂

## 硬化法を用ゐて修理せる浮石寺の壁畫

近 重 眞 澄

大和國法隆寺金堂の畫壁修理が譯の分らぬ事情の下に行惱んで仕舞つたのは公知の事實である。

併し其保存法調査委員會で研究された方法には假しや完全無缺とは云へないにせよ未だ他に何等の對案が提示されずにある以上、目下の處委員會の方法を以て最良とせねばならぬ。金堂の畫壁が何程毀たれて行つても夫れは所有主の考で少しも構はぬと云ふならば他から入らぬ攝介は焼かぬ事である。夫れでも若し何所かに其方法を施行して貰ひたいといふ希望を持つ畫壁があるならば之に應

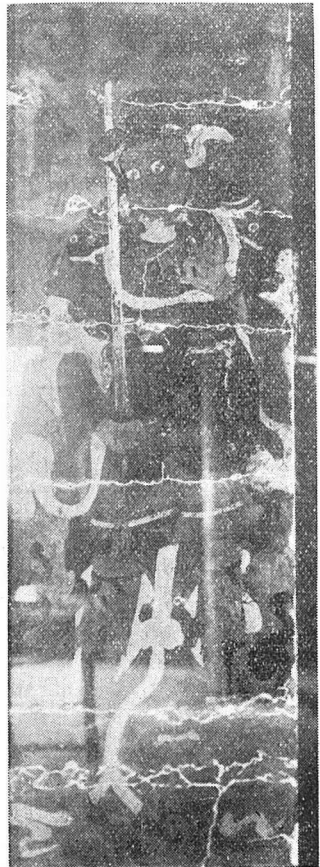
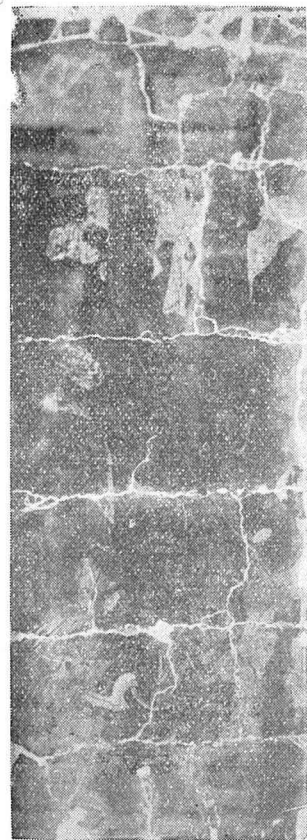
じて實行して見るといふ事は考案者の一人として余の大に興味を持つ處である。時恰も朝鮮總督府に於て其所管に係る一寺院の浮石寺の畫壁が大破に及んで居るから何んとか之が始末をせねばならぬといふ場合に差し迫まつた。聞く所によれば總督府では始めは此畫壁を切取つて之を京城の陳列館に置かうと考へたそうだが、其後かゝる貴重美術品は成るべく之を運搬なごせず原位置にて保存すべきだといふ原則に遵據し浮石寺に残すといふことになつたのである。然らば如何にして

現場で修理保存すべきかといふ問題になつたとき、當時宗務課の渡邊彰氏が關野博士の意見に聽き極力法隆寺に對する保存法、即ち硬化法を以てすべきことを主張した。内外幾多の反對者

もあつた様だが、議は遂に齋藤總督の英斷により採用せられ、文部省から土肥川技手の出張を乞ひ他に總督府からも若干の人が加はり、大正十四

年秋に始め翌々年まで掛つて全部六枚の畫壁が完全に修理せられた。

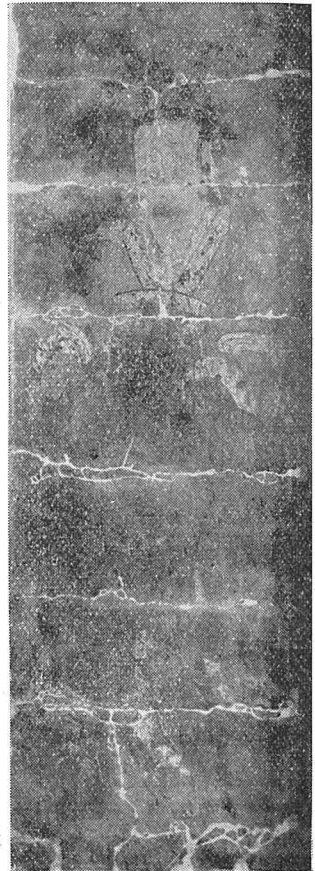
そこで先づ浮石寺について、其歴史を記述しや



う。寺は慶尙北道、榮州郡、浮石面、北枝里に在る。金泉驛で下車し、輕便鐵道に乗換へ終點の店村まで行き。それから自動車で四時間すれば榮州邑に達する。榮州邑から更に二時間餘で漸く浮石寺の山麓に達する。

自動車の通る路は花崗石の崩れた山道や谿谷で水清く山蒼く頗る氣持の良い處である。それから榮州と浮石寺の間で少し迂廻すれば紹修書院の遺趾に行くことが出来る。此書院は李朝中宗

の時、周世鵬の創建し士子讀書の所としたもので我國では足利學校にも當るものか。今日已に大に頽廢し、勿論學校では無くなつて居るが、それで



も建物の形は當時の儘であり、其建物の一に景濂亭といふのは水涯に倚りて設けられ、對岸の小丘には朝鮮式の矮松が叢生して風致が好い。特に此丘に夕方は鶴が下り、曉に飛



去るといふ頗る幽閑の趣がある。尙ほ現在此書院には裕先生が祀られて居る。此人は云ふ迄もなく高麗高宗朝に宋の理學を祖述して朝鮮に儒學を輸入した人である。又此書

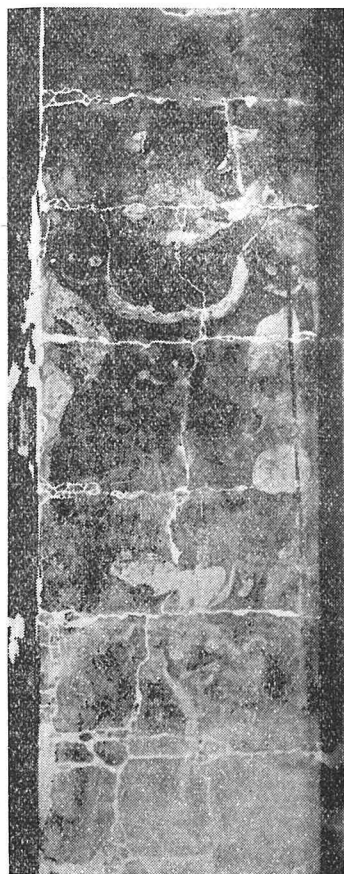
院を主管した代々の學者の中に、李退溪も居たのである。退溪の學風は日本でも之を傳へた人があるかと思ふ。

浮石寺は鳳凰山に倚りて建てられて居る。太白山脈の中である。榮州邑から詰坂上りであるが寺門に近づいて急に三四町ほどの急坂となる。寺樓を安養門といふ。此れからの眺



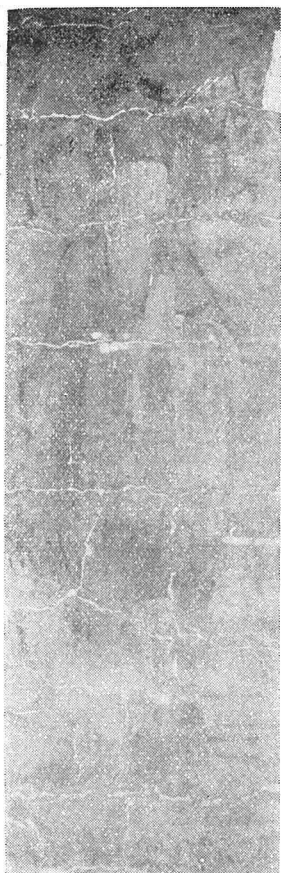
望は頗る雄大である。勿論後ろは山であるから何にも見えない。前面が開いて居る。併し平野ではない。此處では群山、鳳凰に來儀すと謂つて居るが、此の鳳凰山が最も高く前面の群山は嶺又嶺を並らべて寺門に跪伏して居る如く見ゆる。確かに一の壯觀である。寺の勅建は新維文武王八年にあり、義想

太師を開基とする。本堂を無量壽殿といひ高麗朝の再建であるが、今日朝鮮では最古の木造建築だといふのである。本堂から一町ほど上に祖師殿がある。是は本堂より更に後れて再建されたものだが勿論高麗朝の建物である。之には義想太師の木像が安置されて居る。而して其壁に四天王と二菩薩とが描かれて居る。是が問題の畫壁である。祖師堂の構造は建築



家でない自分には詳しい説明は出来ないが、朝鮮式の低い長方形の建物である。柱は法隆寺の門のそれと同じく中程が太くなつて居る。壁は幅三尺

高五尺餘の割合に小さなものである。此壁の構造は柱と柱との間に横に六七本の貫きを入れたものとみえ、之に沿うて横割れが出来て居る。尙ほ此横割れの各に



縦の割れ目も所々現はれて居る。晝も色彩が餘程剝離して餘り判然と分らぬ部分もあつた。

此壁が前述の如く一時は他所に運搬される筈であつたから硬化法を行ふ時には凡て柱から切り放されて居たのは修理には好都合であつたさうだ。そこで修理に先んじ丈夫な檜材の框を作り、各壁を其内に納れ、而して空虚には石膏を填充し、又た龜裂の箇所にも適當に石膏を以て補充することにした。然る後此壁體にコバル、ガムのアルコホルエーテル溶液を注ぎかけ充分に硬化せしめた。之を半年又は一年近く放置して充分濕氣のこれた後框に硝子板の被覆をした。勿論框の横側に穴を設け空氣の流通は完全になるだけの注意も加へてある。かくて修理を終つて晝壁の寫眞は總督府の渡邊氏から余に送られたが、夫れは本文に掲げられて居る通りである。

修理法を始めてから三年で成功したが、爾來又

た已に數年經つて居るから晝壁は修理後長きは四年も立て居る。其間、壁は凡て健全である。要するに今日迄の經過から見て硬化法施行の結果は良好である。但し修理中未だ充分乾燥せぬ一つの壁を密封して越年させたことがあつて、其爲め春口に微が一面に生じた。此は一つの失策であつたが

其微は容易に除去され、又其後には乾燥に注意を拂つた爲め同じ失策は再び爲さなかつたといふことである。何故に壁に濕氣を持つやといふに、アルコホルやエーテルの揮發點は低いから早く無くなるが、揮發の時に熱を吸収するから後の壁土が冷たくなり、之に空氣中の水分が凝縮する。故にコバル液の注射後空氣の流通を良くしないと濕氣が溜まりて害をなすのである。

修理の記事は此位に止める。それは硬化法の詳細は已に文部省から發表されて居り。又た今回の施術は土肥川技手の仕事であるから自分で此以上

書くべきものがないからである。

其所で此記事を終るに當り浮石寺の紹介の爲めに其寺の三奇蹟といふことを書き加へて置かう。

朝鮮に行脚せらるゝ序を以て此寺に行かるゝ諸君は畫壁と共に此三奇蹟をも併せ觀られんことを御勧めします。

第一、禪扉花 此は或は仙飛花とも書かれます。祖師堂の檐の下に生長し全く雨露のかゝらぬ所にある。エニシダに似て菊があり、花が咲く一種の灌木であります。義想大師が本堂の建築を終へ、將に寺を去らんとして其錫杖を地に樹て、余の生死は此杖の榮枯に在りと云つて置かれた。其杖が生きて今日まで残り、以て大師の今日尙ほ現在することを示すものといふ信仰があるのである。千有餘年になる。併し其木が決して無暗と太らなると謂はれ如何にも三四尺の小木であつたが、近年保存の手が行届いて其木も今は檐先きにつかへる

ほどに伸びて來た。只だ雨露が全くかゝらぬのに能く生存するものかと思議に見ゆるのである。

李退溪の詩

濯玉森森倚寺門。僧言卓錫化靈根。杖頭自有曹溪水。不借乾坤雨露恩。

とあるから此雨露のかゝらぬ所で生育することほ早くから人の注目に値したものと見ゆる。

第二、浮石 浮石といふ名から想像して其地方に火山の燒石でも出づるかど考へて行つて見ると違ふ。本堂の左手の崖に疊四五枚ほどもある大盤石が横はつて居るのを云ふ。義想大師の傳に師山川を遍歴して太白山に至り法輪を轉す。然るに曩に師の一女善妙といふもの龍に化して師の法化を贊け來りしが、此時に至り大神變を現し虛空中に於て巨石に化成す。大き一里許にして伽藍の頂を蓋ひ將に墜ちんとして墜ちず。王命じて浮石寺を創めしむとある。故に浮石は虛空に浮べる石の意に

て輕き石を云ふに非らず。今見る石は一里大の巨石ではない、又寺の屋根に蓋ひかゝれるものでもない。只だ此石の地に着く處、何處を探りて糸を通し見るに何の障害もなく通る。結局石は地に着いて居らぬといつて浮石の實を説明して居る。

第三、石龍 此は白い大理石が地面に露出して龍の背に似て居るのを指す。本堂の椽下から數尺離れた處から露はれ長大凡六尺餘あり、只だ此だけのものであるが、此龍の上部は地をもぐりて堂内に入り、頭上に本尊阿彌陀佛を戴せ、下部も亦た伸びて安養門前の大石燈籠から約六尺ほどの地に達せりと云ふ。かく想像して見ると如何にも六尺の背梁が忽ち躍如として空中に飛揚せるかの感がある。余は浮石寺三奇蹟中此石龍を最も雄大だと見た。露出した六尺の背梁が中斷されて居る。是は李朝宣祖の壬辰の亂に明國の李如松が劍を舉げて撃つた時に出來た痕であると傳へられて居る。

硬化法を實施し好成績であつた一例を示す爲めに本文を草し、其序に浮石寺の案内記を足して觀光の折の御參考に供したいと種々無駄を書きました。